

編集後記

雑誌名	日本文学誌要
巻	1
ページ	74-74
発行年	1957-12-01
URL	http://hdl.handle.net/10114/00018953

編集後記

「日本文学誌要」復刊第一号をおくる。

復刊第一号としたが、厳密には、改題復刊第一号といふべきであらう。本誌の前身は、戦前の「国文学誌要」の名のもとに、法政大学国文学研究室で編集されていた学会誌であるからだ。「国文学誌要」は、一九三四年から三六年にかけて、年間三号ないし九号ぐらゐずつ発行されている。この「誌要」刊行の数年間、いうまでもなく、「満洲事变」から「北支事变」への中国侵略の時期と重なる。そしてまた、一九三五年前後の数年間、日本文学研究史の上で特記するべきかわり目の時点でもあつた。すなわち国文学の世界では、今日すでに歴史的称呼となつてゐる「歴史社会学派」なる新しい学風が形成されつつあり（その学派の到達点を示す近藤忠義著『日本文学原論』は、一九三七年二月に出た）、他方にいわゆる「日本文芸学」の提唱が、前者と拮抗するかたちで行われており（岡野義恵「日本文芸学の樹立」一九三四年一〇月「文学」）、さらにもう一方では、一九三五年、雑誌「日本浪漫派」が創刊されこれに拠つて無媒介な古典への回帰、日本精神の復興が鼓吹されはじめようとしていたのである。

やがて時代は本号で小原助教が回想されているような「暗い谷間」にすべりこむ。学問外的な権力の強制を背景に、「曲学阿世」の文運が国文学界の大勢を支配するにいたる。しかし、このような暗い時代への傾斜を

ふくみながらも、前述の時期は、文学の本質、古典と現代等の問題につながる論議が国文学界をゆさぶつた、活気ある季節であつたのだ。そして、まさにこの時期に「国文学誌要」は、定価十銭三、四〇頁の小冊子ではあつたが、のちに『日本文学原論』におさめられた近藤教授の諸論稿をはじめ、文芸学や現代文学についての意欲的な発言をあいっいで世におくり出してゐたのである。「国文学誌要」については、本誌の第二号（明年四月刊）に比較的詳細な書誌がのせられることでもあり、ここでは舌足らずな表現しかできないが、ともかく「誌要」は一大学の会誌たることをこえた意義と役割——国文学の内側から、学問と現代との生きた紐帯をとりもどして、日本古典の研究を市民的な科学たらしめようとした志向を一貫してもちつづけてきたのであつた。

さて、右の「国文学誌要」から二〇年余をへだててようやく本誌をおくり出すことができた。まさにようやくであり、それだけに復刊の喜びは大きい。しかし同時にこの第一号が、戦争—敗戦—戦後というこの二〇年の年輪を内に加えて得てゐるかどうか、旧「誌要」に示された現代との対決の姿勢を、今日の時点で回復し得てゐるかどうか、不安である。

諸賢の忌憚ない批判をおねがいする。（版下記）

日本文学誌要
編集委員
近藤 忠義 小田切秀雄
小原 元 正木 信一
丹慶英五郎 滝瀬 爵克
阪下 圭八 佐瀬 三千夫
野村 誠一 遠藤 進

一九五七年十二月一日発行

定価 八〇円

日本文学誌要 復刊第一号

編集者 法政大学文学部

日本文学研究室
法政大学国文学会

右代表者

近藤 忠義

東京都千代田区神田三崎町二の三

印刷者 千代田印刷

増田秀夫

東京都千代田区富士見町

発行所 法政大学文学部

日本文学研究室

法政大学国文学會